

石油資源は確実に減っている。そこでまた原子力を復興させようとアメリカや日本の原子力産業は狙っている。しかし、原子力もまた地下埋蔵資源であるウランに依拠するのであり、いずれなくなる。何よりも原発には事故や廃棄物問題がある。第2のチェルノブイリを起こさないためには、安全で持続可能なエネルギーの開発を進めるしかない。それが今、世界の緊急課題であり、世界はバイオエネルギーに大きな期待をかけている。

● 2種類のバイオエネルギー

自動車の燃料はガソリンと軽油である。ナタネ・ジーゼル油や、今日本で行われている廃油ジーゼル油は勿論ジーゼル車用である。一方、ガソリン車に使うバイオ燃料はアルコールである。ブラジルはさとうきびの絞り粕から作るアルコールで、車ばかりか飛行機まで飛ばし、今や世界のバイオエネルギー大国である。日本の自動車産業も、今後アルコール燃料で走る車を輸出用に生産するらしい。こうして、世界はバイオ・ジーゼルとアルコール燃料に向かって大きく変わりつつある。EUではバイオ・ジーゼルにはナタネを、アルコール燃料にはテンサイを利用する方向だ。また、アルコールはセルロースの分解でも生産できるので、木材チップも利用可能である。日本では、取り壊した家屋の木材などからアルコールを作る試験プラントがまもなく稼動する。しかし、アメリカのようにバイオジーゼル油を大豆から、アルコール燃料をトウモロコシから作るのは反対である。世界には日々の食糧に事欠く飢餓線上の人々が何億人もいるのである。食用作物からバイオ燃料を作るのは邪道である。

● 日本はかつて菜種大国であった

「菜の花畑に入日薄れ・・・」という童謡もあるように、日本はかつて菜種大国であった。寒い北海道から暖かい九州まで、ナタネは国内何処でも栽培され利用され、その面積は約

30万ヘクタールもあったという。それが、アメリカやカナダから大量の遺伝子組換え大豆やトウモロコシ、ナタネが輸入されるようになり、国内のナタネ栽培は激減した。今では300ヘクタールにも満たない。一方、ドイツでは現在117万ヘクタールでナタネが栽培されている。日本の「ナタネ・プロジェクト」は各地でようやく始まったばかりである。日本も今後、脱原発に向けて様々なバイオエネルギーをはじめ持続可能なエネルギー開発に向けて技術開発や制度の整備を進めなければ、第2のチェルノブイリを国内で起こしかねない。原子力産業は解体すべきである。

● ナロジチを脱原発の基地に

放射能で汚染されたナロジチでナタネを栽培するのは、エネルギー資源に乏しいウクライナにとっても大きな意義がある。ウクライナはかつて石炭の豊富な国であったが、ソ連時代にすっかり掘り尽し、今は危険な場所での採掘で、落盤や火災による事故が頻発している。石油や天然ガスも採れないウクライナの国産エネルギーは、皮肉にも原子力なのである（ウランが採れる）。しかし、チェルノブイリの恐ろしさを最も良く知っているのもウクライナの人々である。ナロジチでバイオエネルギーを生産し、人々の生活を復活させるだけでなく、脱原発の基地として再生できたら、というのが私たちの夢である。 (河田)